

Luncheon Linguistics, 13 Apr 2022

2022 (令和4) 年4月13日

「英語史研究会第31回大会」報告

発表者：佐田 陸 (東京外国語大学大学院博士後期課程)

去る2022年3月20日、英語史研究会第31回大会が開催された。コロナ禍のため、昨年に引き続き対面での大会実施は叶わず、オンラインにて、口頭発表が4件、加えて4名の講師によるシンポジウムが1件行われた。

本報告において、口頭発表より1件、木原桃子氏「複合数詞の変遷とその要因の再分析—名詞句の統語を中心として」を取り上げ、やや詳しく紹介した。発表の要点は下記の通りである。古英語において「21」を表す複合数詞は(現代英語の語を用いて書けば) *one and twenty* <1・と・20> のような形態であった。これが中英語期に十の位と一の位が逆転した *twenty and one* <20・と・1> を経て、現代英語において *twenty-one* <20・1> のような形態になっている。このような歴史的変遷の要因について木原氏は、古英語、および中英語の大規模コーパスを用いた調査を行い、中英語の段階で特に60以上の複合数詞において <20・と・1> 型が多くみられる傾向のあること、フランス語との接触やフランス語文献の英訳の影響が英語の複合数詞の変化に影響を与えていること、韻文における脚韻の都合上変化し得た複合数詞のあることを裏付けた。さらに、名詞句内の主要部の出現位置の変化と複合数詞の形態の変化の関連に着目し、中英語の文献資料を用いた調査を行った。調査の結果、形容詞を伴う名詞句が *good men and true* <A な・X・かつ・B な> 型から *good and true men*, 乃至 *men good and true* <A な・かつ・B な> 型へと変化したのと同じように、複合数詞も <20・X・と・1> 型から <20・と・1・X> 型へと変化した可能性が裏付けられたという。報告者の見立てでは、たしかに、英語史上の変化を見るうえでフランス語の影響は決して無視できないものであるが、ゲルマン諸語の中でも <1・と・20> 型を保っている言語と <20・(と)・1> 型に変化した言語とがあり揺れが見られるので、そうしたゲルマン諸語内での揺れを考慮したり、位置づけを再考したりする余地があるのではないかと思われる。

さらに、シンポジウム「英語史教育の展望—いかに英語史研究の成果を活かすか」についても簡単に紹介した。4名の登壇者から、英語史研究の知見を活かした英語学教育や英語教師養成、中高の英語教育での実践事例が紹介され、議論が交わされた。このうち報告者は、森田真登氏の「高等学校英語教育における英語史の活用」を紹介した。森田氏の実践は、概略、次のようなものである。教科書のある課の文章に出現する語彙について、OED Text Visualizer を用いて、それらの初出年代、使用頻度、語源を視覚化した資料を生徒たちに配り、気づいたことを挙げさせる。生徒たちの気づきをもとに、「なぜ英語には同義語が多いのか」という問いに対する答えを導き出す。この実践について報告者は、生徒が自ら答えを探っていくことで学習したことを納得して記憶しておくことにつながると考えており、大いに評価したと思う。文学傾倒の古典国語の学習にも取り入れてもらいたい実践であるし、さらには、こうした実践を通して一般言語学や記述言語学の知見も言語教育の中に還元することができたら、それほど研究冥利に尽きることはなかろう。